

「東野遺跡」を調査した高校生。

和歌山県内には、縄文遺跡が約200か所あります。紀美野町東野にある「東野遺跡」は、県内でも早くから調査が行われた遺跡で、今から3,000年から2,500年前の縄文時代晩期のもものとされています。『野上町誌』によると「東野遺跡」は昭和26年に初めて試掘が行われ、多くの縄文土器片が出土しました。その中から深鉢形土器が復元できたと書かれています。

続いて昭和36年に発掘調査が行われ、炉跡遺構が3か所確認できたこと、また、出土した遺物の中で貴重なものが和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋）に保管展示されたことも記されています。これらの土器は、今どこに保管されているのでしょうか。

紀美野町文化財担当の方に調べていただき、「羯磨コレクション」として収蔵されていることが判明、令和4年10月21日、紀伊風土記の丘の収蔵庫で対面することができました。写真でしか見たことがなかった「東野遺跡」出土の土器や石器を間近にでき、感慨深いものがありました。右上の写真は深鉢形土器で、『野上町誌』に紹介されている復元できた土器でした。



驚くことに、昭和36年の発掘調査に関わったのは、県立大成高校（現海南高校大成校舎）の教員の羯磨正信氏と大成高校社会科クラブ、いわゆる「郷土部」の高校生たちでした。郷土部は、昭和35年の小川八幡神社に伝わる「大般若経」の調査にも関わっていて、学術研究レベルの高さにも驚かされます。

稲刈りが済んだ田んぼで頭を寄せ合い、1つも逃すまいと覗き込んでいる高校生の姿は、62年経った今も新鮮です。

（令和4年12月23日）